

戦時下の市民

戦時下の国民は、国家総動員体制の

もとでの生活を強いられた。昭和十六年（一九四二）四月には小学校が「国民学校」となり、皇民教育と鍛錬が施された。例えば、十七年四月には稚松校で献納陸軍戦闘機の命名式が行われ

ている。

食糧増産のため、十七年五月、安宅林三二町歩の開墾が勤労奉仕により完了。ただし、「農業生産統制令」により指定作物以外の栽培が禁止され、小松の繊維産業を支えた桑園も姿を消した。また、苦境



防空演習(小松市立博物館提供)

の金属器に代って、一時九谷焼の生産が増えたものの、太平洋戦争が始まると生活用品は苦境に。このため、八幡の陶工五〇人らが朝鮮に渡り陶器製造を試みたこともある。



小松商業高校金属回収奉仕作業(『小松市制50周年記念誌』より)

一方、小松製作所は、十九年一月県下唯一の「第一次指定軍需工場」となる。十月には小松工場の拡張を行い、



日中戦争の戦死者町葬(小松市立博物館提供)

十三年三月に増設した粟津工場とともに、軍需品を徹夜操業で製作した。この頃の従業員総数は一万一〇〇〇余人。うち応召者・徴用工・動員学徒は、それぞれ八〇〇・九〇〇・六〇〇人であったという。



忠霊塔(『加賀こまつ』より)



小松警防団(小松市立博物館提供)

十九年には、空襲に供えた「学童集団疎開実施要綱」が発表され、学童たちは地方への疎開を始める。七月、一万五〇〇〇人が石川県に疎開することに決定。小松市の受入は一二〇〇人で、市内照善寺等を宿舎に、青年会館を校舎として異郷生活が始まった。二十年に入ると地方都市の空襲も緊迫化し、七月、県は小松市ほかの間引き疎開地区を発表、一三七戸に取り壊しの命令が下った。こうした困窮と混乱のなかで、市民は終戦を迎えたのである。

(本康宏史)